

## ロシアの革命的社会民主主義者の妥協

プロレタリアートの最初の社会主義革命がおこったのちでも、一国でブルジョアジーが打倒されたのちでも、ブルジョアジーは膨大な国際的結びつきをもっているということからだけでも、さらにブルジョアジーを打倒した国の商品生産者が資本主義とブルジョアジーを自然発生的にたえず再生させ、復活させているということからしても、この国のプロレタリアートは**長いあいだブルジョアジーよりも弱い**。力のまさっている敵に打ち勝つことは、最大の努力をはらうばあいにはじめてできることであり、**かならず**、もっとも綿密に、注意ぶかく、慎重に、たくみに、たとえどんなに小さなものであろうと敵のあいだのあらゆる「ひび」を利用し、各国のブルジョアジーのあいだや、個々の国内のブルジョアジーのいろいろなグループまたは種類のあいだのあらゆる利害の対立を利用し、また大衆的な同盟者を、よしんば一時的な、動揺的な、ふたしかな、たよりにならない、条件的な同盟者でも、手にいれる可能性を、それがどんなに小さいものであろうと、すべて利用するばあいにはじめてできることである。このことを理解しないものは、マルクス主義と科学的な近代社会主義**一般**をすこしも理解しないものである。かなり長い期間、そしてかなり多様な政治情勢のもとで、この真理を実際に適用する能力を**実践的に**証明していないものは、働く人類全体を搾取者から解放するための闘争のなかで、革命的階級をたすけるすべをまだ学んでいないものである。そして以上に述べたことは、プロレタリアートが政治権力を獲得する**まえ**の時期にも、**あと**の時期にも同じようにあてはまる。

われわれの理論は教条ではなく**行動の指針**である、とマルクスとエンゲルスは言った。ところがカール・カウツキーやオットー・バウアーらのような「特許」マルクス主義者の最大の誤り、最大の罪悪は、彼らがこのことを理解せず、プロレタリアートの革命のもっとも重要な時機にこれを適用することができなかったことである。「政治活動はネフスキー大通りの歩道（ペトログラードのまっすぐな目抜き通りのきれいな、広々とした、平らな歩道）ではない」とマルクス以前の時代のロシアの偉大な社会主義者、エヌ・ゲ・チェルヌィシェフスキーはよく言った。ロシアの革命家たちは、チェルヌィシェフスキー以来、この真理を無視したり、わすれたりしたために、数しれないほどの犠牲をはらってきた。西ヨーロッパとアメリカの共産党左派および労働者階級に一身をささげている革命家が、この真理を自分のものにするのに、おくれたロシア人のように高い代価を支払わないように、ぜがひでもさせなければならない。

ロシアの革命的社会民主主義者は、ツァーリズムがたおれるまえに、ブルジョア自由主義者の助けをなんども利用した。すなわち、彼らと多くの実際の妥協をして、1901—1902年、まだポリシェヴィズムが生まれないうちに、旧『イスクラ』編集局（この編集局にはプレハーノフ、アクセルロード、ザスーリッチ、マルトフ、ポトレソフと私がいっていた）は、ブルジョア自由主義派の政治的指導者であるストルーヴェと正式の政治同盟をむすんだ（もっとも、それは長いものではなかった）が、それと同時にブルジョア自由主義派にたいし、また労働運動内部のブルジョア自由主義派の影響のどんなに小さな現れにたいしても、まったく仮借することのない思想上および政治上のたたかいをおこなうことができ、それをやめなかった。ポリシェヴィキは、いつもこの政策をつづけてきた。1905

年以後、ボリシェヴィキは自由主義的ブルジョアジーに反対して労働者階級と農民の同盟を系統的にまもると同時に、ツァーリズムに反対してブルジョアジーを支持すること（たとえば選挙の第二段階で、または決選投票のときに）をこぼまなかったし、ブルジョア的・革命的農民党、すなわち「社会革命党」にたいするまったく仮借するところのない思想上および政治上のたたかいをやめず、この党員がいつわって社会主義者と自称する小ブルジョア的な民主主義者であることを暴露した。1907年に、ボリシェヴィキは国会の選挙にあたって短期間、「社会革命党」と正式の政治的ブロックをむすんだ。1903 — 1912年にはわれわれはメンシェヴィキと数年間、単一の社会民主党に正式にはいつていたが、プロレタリアートにたいするブルジョア的影響の伝達者であり、日和見主義者である彼らと、思想的および政治的にたたかうことをけっしてやめなかった。戦時には、われわれは「カウツキー派」、メンシェヴィキ左派（マルトフ）、部分的には「社会革命党」（チェルノフ、ナタンソン）とある種の妥協をし、ツィンメルヴァルドとキンタールでは彼らと同席し、共同宣言をだしたが、しかし「カウツキー派」、マルトフ、チェルノフ（ナタンソンは1919年に死んだが、彼はわれわれに非常に近く、われわれとほとんど提携できるナロードニキ派「革命的共産主義者」であった）と思想的および政治的にたたかうことをけっしてやめなかったし、またよわめもしなかった。ちょうど十月変革のときに、われわれは正式なものではないが非常に重要な（そしてきわめて成功した）政治的ブロックを小ブルジョア的農民とむすび、**エス・エル**の農業綱領をそっくり、すこしの変更もくわえないで採用した。すなわち、われわれが数で押しきろうとするものでなく、農民との協調をのぞんでいることを農民に証明するために、疑う余地のない妥協をしたのである。同時にわれわれは、「エス・エル左派」にたいして、正式の政治的ブロックをむすび、政府に参加するよう申し入れた（これは、まもなく実現した）。ところが、彼らはブレスト講和の締結ののち、このブロックをやぶり、ついで1918年7月にはわれわれにたいして武装蜂起を、またその後はわれわれにたいして武装闘争をするまでになった。

そこで、ドイツ共産党中央部が「独立派」（「ドイツ独立社会民主党」、カウツキー派）とのブロックという考えをみとめていることをドイツの左派が攻撃しているのは、われわれにはまったくふまじめな、かつ「左派」の**まちがい**をはっきり証明するものだとして当然おもわれる。わがロシアにも、ドイツのシャイデマン派にあたるメンシェヴィキ右派（ケレンスキー政府にはいつていた）と、ドイツのカウツキー派にあたり、メンシェヴィキ右派にたいして反対派であったメンシェヴィキ左派（マルトフ）とがいた。われわれは、労働者大衆がメンシェヴィキからしだいにボリシェヴィキにうつっていくのを、1917年にはっきり見た。1917年6月の第一回全ロシア・ソヴェト大会では、われわれは全投票数のわずか13%しか占めていなかった。大多数の票はエス・エルとメンシェヴィキの手にあった。第二回ソヴェト大会（旧暦1917年10月25日）では、われわれは全投票数の51%をえた。ドイツでも労働者に右から左へと**同じような**、まったく**同じ性質**の移動がおこったのに、なぜそれがすぐに共産党の勢力を強めないで、まず「独立派」という中間的な政党的勢力を強めたのであろうか？ この党は、なんの自主的な政見も、自主的な政策ももったことがなく、シャイデマン派と共産党員のあいだを動揺していたにすぎないのに。

その原因の一つがドイツ共産党員の誤った戦術であったことは、明白である。彼らはおそれることなく、正直にこの誤りをみとめ、それをただすすべを学ばなければならない。

誤りは、反動的なブルジョア議会と反動的な労働組合に参加することを否定したことである。誤りは、「左翼」小児病が無数に現れたことである。この病気は、いまでは表面に現れており、それだけによりよく、より早く、それだけ身体にききめがあるように治療されるであろう。

ドイツ「独立社会民主党」の内部は、あきらかに同質なものではない。この党には、ソヴェト権力とプロレタリアートの独裁との意義を理解する能力がなく、プロレタリアートの革命的闘争を指導する能力のないことを証明した古い日和見主義的指導者(カウツキー、ヒルファディング、かなりの程度までクリスピーン、レーデブールその他もあきらかにそうである)とならんで、プロレタリア左翼が結成され、目ざましい速度でのびている。この党(ほぼ75万の黨員をもっているとおもわれる)の数十万の黨員は、シャイデマンからはなれて、急速に共産主義のほうにすすんでいるプロレタリアである。このプロレタリア左翼は、すでに独立社会民主党ライプツィヒ大会(1919年)で、第三インターナショナルに即時無条件に加盟するよう提案している。党内のこの左翼と「妥協」することをおそれるのは、まったくこっけいである。反対に、共産黨員は**かならず**彼らと妥協する適当な形態を探しとめ、また**見つけださ**なければならない。このような妥協は、一方では、この一翼との欠くことのできない完全な合同をたやすくし、促進し、他方では共産黨員が「独立派」の日和見主義的な右翼にたいして思想的・政治的にたたかうのをけっして妨げてはならない。おそらく、妥協の適当な形態をつくりあげることがたやすすくないだろうが、ドイツの労働者とドイツ共産黨員に勝利への「たやすい」道を約束することができるのは、山師だけである。

もし「純粋な」プロレタリアートが、プロレタリアから半プロレタリア(労働力を売って生計の半分をえているもの)まで、半プロレタリアから小農(および小手工業者、クスターリ、小経営主一般)まで、小農から中農まで、等々の大量のきわめて雑多な過渡的タイプに取りまかれていないならば、また、もしプロレタリアートそのものの内部にすすんだ層とおくれた層という区分や、地域により、職業により、ときには宗教その他による区分がないならば、資本主義は資本主義でなくなるであろう。すべてこういうわけで、プロレタリアートの前衛としては、プロレタリアートの自覚した部分としては、すなわち共産党としては、迂回することが必要になり、プロレタリアのいろいろなグループ、労働者や小経営主のいろいろな党と協調し、妥協することが必要となり、それも無条件に必要となり、絶対に必要となるのである。すべての問題はプロレタリア的自覚、革命精神、闘争能力と勝利をかちとる能力の一般水準を引下げず、**たかめる**ために、この戦術を適用する**すべを知る**ことである。ポリシェヴィキがメンシェヴィキに勝つためには、1917年の十月革命のまえばかりでなく、その**あとでも**迂回政策、協調、妥協という戦術を適用する必要があったこと、もちろん、このような戦術の適用は、メンシェヴィキを犠牲にしてポリシェヴィキ〔の勝利〕をたやすくし、促進し、打ちかため、強めたということ、とりわけ注意しなければならない。小ブルジョア的民主主義者(メンシェヴィキもふくめて)が、ブルジョアジーとプロレタリアートのあいだ、ブルジョア民主主義とソヴェト制度のあいだ、改良主義と革命精神のあいだ、労働者にたいする愛とプロレタリア独裁の恐怖とのあいだ等を動揺することはまぬかれない。共産主義者の正しい戦術は、この動揺を**利用**することであって、けっしてそれを無視することであってはならない。この動揺を利用するに

は、プロレタリアートのほうに向きをかえる分子には、彼らがそうする時とそうする程度に応じて譲歩すると同時に、ブルジョアジーのほうに向きをかえる分子とはたたかわなければならぬ。正しい戦術を適用した結果、わが国ではメンシェヴィズムはますます崩壊していったし、いまも崩壊しつつある。そして、ごりごりの日和見主義的指導者を孤立させ、小ブルジョア的民主主義派からもっともすぐれた労働者、もっともすぐれた分子を、われわれの陣営へうつらせている。これは長期にわたる過程である。そして「どんな妥協もしない、どんな迂回政策もとらない」という性急な「決定」は、革命的プロレタリアートの影響を強め、彼らの勢力を増強する仕事に害をあたえるにすぎない。

第31巻『共産主義内の「左翼主義」小児病』P56～62

1920年4月～5月に執筆

## ポイント

ロシアの革命的社会民主主義者は、ツァーリズムがたおれるまえに、ブルジョア自由主義者の助けをなんども利用した。すなわち、彼らと多くの実際上の妥協をして、正式の政治同盟をむすんだが、それと同時にブルジョア自由主義派にたいし、また労働運動内部のブルジョア自由主義派の影響のどんなに小さな現れにたいしても、まったく仮借することのない思想上および政治上のたたかいをおこなうことができ、それをやめなかった。ボリシェヴィキは、いつもこの政策をつづけてきた。

もし「純粋な」プロレタリアートが、プロレタリアから半プロレタリア（労働力を売って生計の半分をえているもの）まで、半プロレタリアから小農（および小手工業者、クスターリ、小経営主一般）まで、小農から中農まで、等々の大量のきわめて雑多な過渡的タイプに取りまかれていないならば、また、もしプロレタリアートそのものの内部にすすんだ層とおくれた層という区分や、地域により、職業により、ときには宗教その他による区分がないならば、資本主義は資本主義でなくなるであろう。すべてこういうわけで、プロレタリアートの前衛としては、プロレタリアートの自覚した部分としては、すなわち共産党としては、迂回することが必要になり、プロレタリアのいろいろなグループ、労働者や小経営主のいろいろな党と協調し、妥協することが必要となり、それも無条件に必要となり、絶対に必要となるのである。すべての問題はプロレタリア的自覚、革命精神、闘争能力と勝利をかちとる能力の一般水準を引下げず、たかめるために、この戦術を適用するすべを知ることである。

共産主義者の正しい戦術は、改良主義と革命精神とのあいだの動揺を利用することであって、けっしてそれを無視することであってはならない。この動揺を利用するには、プロレタリアートのほうに向きをかえる分子には、彼らがそうする時とそうする程度に応じて譲歩すると同時に、ブルジョアジーのほうに向きをかえる分子とはたたかわなければならぬ。